徳川家達公爵と中浜東一郎との交流
－「中浜東一郎日記」から読み解く　その１－

塚本　宏

はじめに

徳川宗家第十六代徳川家達公爵と土佐の漁師中浜万次郎との間に、どのような繋がりがあったのだろうか。もちろん、生前、両者が直接会えたはずがない。筆者が、初めて徳川家達に関心を持つことになったきっかけは、昭和4年に高知県幡多郡清水町中ノ浜（現・土佐清水市）に建設された「中濱萬次郎翁記念碑」に刻まれた碑銘が、公爵徳川家達の書であり、また、万次郎がかつて咸臨丸での帰途、ハワイに寄港した際、デーモン牧師に贈呈した日本刀を研磨・修繕して昭和8年にハワイへ送り返した時の箱書き「国際親善之寶剣」もまた家達公爵の揮毫であったからである[1)2)]。

「中濱東一郎日記」（以下、「日記」という）を読み解くことによって、徳川公爵家と中浜家との交流に迫ってみようとした試みが本稿のテーマである。「日記」に入る前に、順序として徳川家達（1863－1940）がいかなる人物だったかを語ることから始めよう。

1.「徳川家達（いえさと）」とはどんな人物か

徳川家達（幼名・亀之助）は、文久3（1863）年7月、御三卿の一つ田安家第六代・慶頼（松平春嶽の実弟）の三男として生まれ、慶応4（1868）年、僅か4歳で徳川宗家を相続して以来、昭和15年6月に76年の華麗で波乱に富む生涯を終えるまで、将軍ではないものの通称「第十六代様」と呼ばれた人物である。

有名な「最後の将軍」第十五代徳川慶喜は、明治期以降になると、実は影の存在であった。むしろ第十六代家達の方が日本近代史では「主役」とは言えないものの、余程大きな仕事を残したと言ってよかろう。

渋沢栄一が組織して刊行した全8巻の「徳川慶喜公伝」（1918年刊）に匹敵するような徳川家達の「伝記」が、

実は生前から計画され、没後、直ちに5か年計画で編纂事業が始まったのであるが、第二次大戦の激化によって中止のやむなきに至り、まさに「幻」の大著「徳川家達公伝」は実現しないままで終わったのである。

既にお分かりの通り、家達の略伝すら僅かな字数では到底書き表すことはできないので、興味のある方には、樋口雄彦のコンパクトな好著「第十六代徳川家達―その後の徳川家と近代日本―」をお薦めしたい。ここでは、その触りだけ（といっても彼の略年譜を「肩書」とともに羅列するだけに留めている）を要約してみよう（樋口雄彦[3]、柳田直美[4]の略年譜を参考にして作成）。

① 1868年　駿河府中城主（70万石）
② 1869年　版籍奉還により静岡知藩事
③ 1871年　廃藩置県により知藩事を罷免され、東京に移住
④ 1877－82年　英国留学（この間、仏、伊旅行など体験）後、帰国
⑤ 1884年　華族令により、公爵に叙せられる
⑥ 1898年　華族会館長に就任（1935年まで）
⑦ 1890年　帝国議会開設と同時に、貴族院議員となる
⑧ 1903年　貴族院議長に選任され、33年に辞任するまで、約30年間在任
⑨ 1907年　東京慈恵会会長に就任、のち東京慈恵会医科大学総裁（1922年）
⑩ 1913年　恩賜財団済生会会長（第二代）に就任
⑪ 1914年　山本権兵衛内閣総辞職により、後継内閣の内命を受けるも拝辞
⑫ 1916年　学習院評議会会員に任命される（1935年まで）、のち評議会議長（1919年）
⑬ 1917年　静岡育英会総裁に就任
⑭ 1920年　国際連盟協会総裁に就任
⑮ 1921年　ワシントン会議の全権委員に任命（9月）され、翌年1月末帰国
⑯ 1929年　日本赤十字社社長に任命される
⑰ 1930年　ロンドンの列国議会同盟会議（6月）、ブリュセルの国際赤十字総会（10月）出席
⑱ 1933年　欧米視察、英国国王に拝謁、ルーズベルト大統領・ハル国務次官と会見
⑲ 1936年　第十二回オリンピック東京大会・組織委員会会長に就任
⑳ 1937年　紀元二千六百年奉祝会会長に就任
㉑ 1938年　ロンドンの赤十字国際会議出席のため出発、カナダ旅行中、発病し急遽帰国
㉒ 1940年　6月5日　死去

ご覧のとおり、近世の終焉と近代の消長とを身を持って体験したのが徳川家達の生涯であった。しかし、樋口[5]が言うように「彼が他の旧大名たちの多くのように、何もできない『バカ殿』や『世間知らずの華族様』でもなく、また単なる『お飾り』『ロボット』でもなかったこと」は明らかである。

また、彼には、「幻の」が付くいくつかのエピソードが付き纏う。

ア　もともと第十四代将軍・徳川家茂が死去した際の後継争いで、天璋院（第十三代将軍・家定の未亡人）は、家茂の遺志であるとして田安亀之助を推したが、幕府の危急存亡の秋、血筋という点からふさわしい後継者ではあったが、幼い将軍を立てることは非現実的ということから第十五代慶喜に決定したので、「幻の将軍」と言うことになる。

イ　大正3（1914）年、家達が拝辞していなかったら、「幻の徳川内閣」が誕生していたであろう（上記⑪）。原口は、この時期の家達の政治的位置について、「公平」「無色透明」に徹して「高潔にして賢明な」政治家像とい

う大方の評価は正しく、「大命拝辞」といっても組閣に失敗して政治的な失点を負ったわけではないので、以後も長く議長職を全う出来たのだと考察している。[6)]

ウ　日中戦争の長期化と、それに伴う国民総動員体制が進行していなかったら、千駄ヶ谷の徳川邸がオリンピックの会場候補地に上がっていたことでもあり、これまた「幻の組織委員長」に終わったのである。

2. 私人としての家達の日常と人柄

上記のように、貴族院議長を始め政治家・外交官の顔を持つだけでなく数多くの公職についていた家達だが、

DR. T. NAKAHAMA,
Donor of the Sword.

広大な千駄ヶ谷邸における私人としての彼の素顔や人柄を見てみよう。幸い、二人の孫娘から「おじじ様」と呼ばれていた頃の「思い出」が公刊されているので、以下はそれらを抜粋して紹介したい。

ア　松平豊子（第十七代家正の長女で、第十八代恒孝（つねなり）の実母に当たる）の話[7)]　「祖父は今ならば160センチちょっと位なのに体重は20貫（75キロ）以上あった。よく私達孫に、お腹の廻りに手を廻してごらんといわれ、手を廻すとウンと力み、手がプツンと切れるのがご満足であった。……非常な健啖振りで、お皿を全部空にして積み上げたりされた。少し糖尿の気があって甘いものは禁じられており、祖母（泰子（ひろこ）、近衛篤麿（1863－1904）の妹）が厳しく監督するので、お饅頭等はあん抜きであった。」もちろん、酒・煙草も嗜まず、「泰さんは私の為を思ってしてくれるのだから、黙っているのだよ」と仰るほど円満な性格の持ち主で、「結構茶目っ気もあり孫たちと一緒にふざけ、楽しかった」という。

イ　保科順子（ゆきこ）（家正の三女、上総飯野藩保科家・光正夫人）[8)]

「祖父の人となりについては、孫たちの受ける全体像は、やはり厳格（…平常から「十六代様」のニックネームに相応しい威厳を保ちながら）で、一家の長としての風格に満ちたものであった。一家の全ては祖父を中心に回転し、……そうかと言って、決して近付き難い人柄ではなく、時には思いもかけぬユーモラスな面を見せ、一家中が笑いに誘い込まれることも度々であった。

「祖父の家庭にいる時の定位置は、主に書斎か奥の『お居間』だった。……それこそ『御書（ごしょ）』（依頼された書の揮毫）と『お貼り物』（新聞社などからくる切り抜き（「通信」と呼ばれた）をスクラップ・ブックに糊貼して整理する）

ばっかり。」

多忙な中にも家達は趣味として、両国・国技館の相撲を欠かさず観戦したり（順子によると「回向院長」のニックネームまで持ち、実際、回向院境内には家達揮毫の「力塚」（大日本相撲協会の建立）まであり）、宝生流の謡曲（同好の一族たちと「十徳会」という会も催した）、さらに読書、トランプのブリッジなども楽しんだという。

3.「日記」に入る前の「キーワード」

本題である「日記」を読み解くには、事前に知っておいてもらいたい、「キーワード」がいくつかあるので、その解説をしておくと理解に便利であろう。

ア　旧幕臣の諸団体[9－11)]

明治政府が薩長土肥の藩閥の強力な後ろ盾の上に成り立っていたことは言うまでもない。対する旧幕臣たちは、まさに「敗者」であったので表立った閥を作って対抗する勢力にはなり得なかった。とは言え、「箱館戦争」の戦友たちによって結成された「碧血会」（会長・榎本武揚）を始めいくつもの旧幕臣の親睦団体があった。その中核を担ったのが、明治28（1985）年設立の「**同方会**」（初代会長・榎本武揚）[9)]であった。

「会則」によると、年齢16歳以上の旧幕臣の子孫をもって組織し、智徳を研磨し、友誼の親密をはかり、風気を発揚することを目的にしており、会自身が使用した言葉に従えば「社交倶楽部」の性格をもつ団体であった。会の運営は5名の「幹事」が担ったが、第二次大戦と敗戦の混乱の中で自然消滅するまで事務局長兼会誌編集を務めたのは、赤松範一（1871－1945）であった。彼は、ご存知の咸臨丸で万次郎（教授方・通弁主務）と一緒に乗船した赤松大三郎（教授方手伝、のちの則良、男爵・海軍中将）の長男で、実業家、世襲男爵・貴族院議員としても活躍した。明治38年8月の「名簿」では、賛成員（旧幕臣出身の名士で寄付金を拠出する長老）59名、一般会員410名を数えていた。

大会は春秋の2回開催され、会場には上野東照宮や、料亭、時には榎本会長邸が使用された。その他、定例行事として、徳川公爵邸への新年参賀、上野東照宮祭礼への参拝などがあり、会として臨時に取り組んだ行事には、日清戦争に際し旧幕並静岡県出身将校諸氏凱旋歓迎会、徳川慶喜の公爵授与祝賀会、日露戦争凱旋祝賀会、榎本武揚銅像建設への拠金、徳川家達の御家名相続70周年記念式典などの例がある。

いま一つ、有力な旧幕臣親睦団体として、明治44（1911）年9月に設立された「**葵会**」[10)]があげられる。「幕府ノ旧臣及其子孫ヲ以テ組織シ旧交ヲ温メ懇親ヲ結フヲ目的」にして、毎年1回懇親会を開き、徳川両公爵やその家族の臨席を仰ぐことになっていた。会員に御三卿の旧家臣をも含めていた点が，同方会との違いだったが、両方の会にメンバーとして名前を連ねる人も大勢いた。歴代会長には，赤松則良、江原素六、石渡敏一、大久保立、などの名前が分かっており、昭和9年時点で評議員34名、幹事11名、会員550名を数え、戦後まで続いたようである。

イ「茶話会」

家達は、徳川宗家の当主、あるいは旧藩主として、上記諸団体の頂点に位置する付合いをしていたが、その他、より厳選した少人数の人々と、自邸や貴族院議長官舎で「茶話会」[11)]を開いて、一層親密な交流をしていた。常連の招待者であった荒川重平（海軍兵学校・海軍大学教官）が残した、個人的な記録を見ると、招待されたのは、博士の学位を持つ学者、将官級の軍人、高級官僚などであった。専門のテーマについての講話だったが、家達だけでなく、時には夫人、子息、娘たちも加わり、茶話会というより食事会だったという。

招待者は、いずれも旧幕時代の家柄・格式・禄高などには無関係で、むしろ近代社会の進展に伴い自らの能力によって社会の上層部にのし上がった人たちであった。このような人材を取り込んで、その力を活用して行こうとした家達の努力の表れとみてよい。

ウ 「学習院女学部」

「学習院百年史」[12]によると、明治18年に宮内省所轄の「華族女学校」が創設されたが、当初から生徒は華族の女子だけでなく、「本校の都合により士族平民の女子も入学は許可」されていた。明治39年に華族女学校は学習院と合併して、「学習院女学部」と改組され（当時麹町区永田町に所在）、さらに明治45年の火災を経て、大正7年には青山に移転して女子学習院となったのである。

なお、家達の長女・綾子姫と東一郎の三女・綾子が通学していた当時、陸軍大将・乃木希典が学習院院長を務めていたことを付記しておこう。

4.「日記」から覗える「家達と東一郎」の絆

いよいよ、「日記」の中身に立ち入って、徳川家達と中浜東一郎とを結び付けた絆が何かを模索する作業を始めよう。

ア 「二人の綾子」の取り持つご縁

東一郎の三女・綾子（明治27年生れ）は、明治40年3月、回生病院に隣接する同じ敷地内の住居から最寄りの麹町区番町小学校に通い、「全甲」の成績で卒業し、学習院女学部を受験した（＜明治40年3月28－30日＞、以下、鉤括弧＜　＞内は「日記の日付」、以下同じ）。彼女が学習院を選んだ経緯や、入学式をはじめ、5年間の学園生活の詳細について、「日記」にはほとんど記載がないが、無事に中学校の学業を終えて、母・芳子の列席のもと、矢張り全甲の優秀な成績で卒業式に臨み、式場では岡部子爵の令嬢とともに洋琴の演奏をして上出来だったという＜明治45年3月30日＞。

全くの偶然ながら、中浜綾子と家達の長女・綾子（明治30年生れ）とは、3年の年齢差があるが同じ名前（漢字も読みも）であり、「卒業生名簿」[13]によると、後者は大正3年の卒業生で、もちろん同級生ではない。しかし、当時の一学年の生徒数は70数名だったので、同名のご縁からお互いに知り合い親しくなったことは想像に難くない。

もう一つの偶然も付け加えておこう。「二人の綾子」は、ともに当時としては珍しい八頭身美女だったのである。中浜の方（のちの小寺綾子）については、1967年11月に放映されたNETテレビ放送網の「ジョン万次郎」（日本初、世界4元中継）を北代淳二会長のお世話によりDVDで視聴した際に、一瞬の動画シーンで見た小寺綾子の容姿の印象からそう申し上げて良いだろう。

また、徳川の方（のちの福井松平家・康正夫人）は、立派な写真入りで説明されているので一目瞭然である。それは、倉持基が、自らの著書「華族のアルバム」の中で、172センチの和装モデルとして当時、三越最初のポスターに決定していたところ、父・家達の知るところなって実現しなかったというエピソードを紹介しているからであり、まさに「幻のポスター」に終わったのである。[14]

（次の写真の前列右から2番目が徳川綾子（この時は松平綾子）である。）

学習院卒業前後における、二人の親密な交友関係を物語る「日記」の記載は次のとおりである。

① 「海水〔浴〕を為す。明（三男）、絹子（四女）共能く泳く。徳川公爵令嬢、綾子と共に散歩し、午後は綾子同嬢を海浜院へ誘ふ。」＜大正2年8月15日＞

② 「……午後三時より自動車にて綾子を伴ひ、水交社にて開きたる同朋〔方〕会懇親会に出席。徳川公爵御一家御来会。綾子は綾子姫と手を携へて庭内を歩し遊戯したり。」＜大正2年9月28日＞

③ 「昨日徳川公爵令嬢綾子嬢より、綾子へ祝儀として写真挿一台を贈与せらる。」＜大正4年3月23日＞

④ 「徳川公爵（家達）令嬢松平家へ嫁し、本日築地精養軒にて披露の宴あり、綾子も招待せられたりと云ふ。」＜大正5年2月8日＞

ここで、2，3補足説明すると、①については、公爵令嬢が在学中の夏休みに逗子にあった公爵の別荘[8]から東一郎の別邸のあった鎌倉を訪ねて来たものと推測できる。③は綾子への「結婚祝い」であるが、綾子はすでに在学中に土方寧（1859－1939、土佐出身の法学者、東京帝大・法科大学学長（在任期間・1911－18）、のちの男爵）夫妻の仲介により見合いをし＜明治44年8月21日＞続いて、結納も済ませていた＜同年11月21日＞が、婚約者・小寺又吉（兵庫県三田出身の資産家で貿易商、彼の長兄・小寺謙吉は当時、衆議院議員、戦後初の公選・神戸市長）の仕事の都合で大正4年に結婚した＜同年4月18日＞。

一方の綾子嬢は、大正5年に越前福井松平家第十九代当主・康昌（松平春嶽の孫で、戦後の混乱期の内大臣秘書官長を務め、GHQと接触して東京裁判対策にも当たった）と結婚した。[14]

イ 「茶話会」への招待

「日記」の中に家達の名前が、最初に出てくるのは、綾子が学習院に入学した翌年の明治41年12月のことで、徳川家達公爵が発起人となった、鍋島、細川両侯爵らの「清国各地漫遊の帰朝歓迎会」（新設の有楽座での）に東一郎が出席したという記載が最初であった＜明治41年12月22日＞。当日、両者が面談した気配はなく、詳細は不明であるが、第十五代・徳川慶喜公爵とは「小石川第六天（邸）を訪ねて揮毫を依頼し、快く承諾された」との記載がある＜明治42年6月27日＞ので、この頃までは家達より慶喜の方が、より親しい間

柄にあったことが読み取れる。

東一郎が、「茶話会」に初めて招待されたのは、さらに遅れて明治44年になってからである（「午後五時徳川公爵（家達）方にて茶話会の案内あり、予は淀橋より電車及人力車にて、五時前、公爵邸に行く。公爵御夫婦の姫君も出席、会するものは……」＜明治44年5月27日＞）。

この回を含めて、「日記」には以下の通り、都合7回も茶話会に出席している。

第2回　テーマは不明だが「（東一郎に）一場の演説依頼あり」＜大正2年10月23日＞。

第3回　貴族院議長官舎で開催、夫人令嬢二人、慶久氏、家正氏も同席＜大正5年6月24日＞。

第4回　洋食の饗応を受け「又公爵御夫妻より小寺綾子は子持となりたるやとの問抔ありたり」＜大正7年6月18日＞（綾子嬢を介してではあろうが、家達公爵の綾子への関心が並々ならぬものであったことが窺えるエピソードではなかろうか）。

第5回　この時は、赤松範一も同席している＜大正9年5月1日＞。

第6回　「来十四日茶話会ありとて御召の書徳川家達公爵より来る。出席の旨通知す。」但し、当日付の日記を書き忘れているが、常識的には彼が無断欠席したとは考え難い＜大正11年12月1日＞。

第7回　昭和に入ってからも、「今日は千駄ヶ谷公爵の『御茶の会』、予も午後五時頃より出席。来会者は予の外左の九人なり……」＜昭和9年9月26日＞。

以上のように、当時、東一郎は、幼い頃より父・万次郎から英語を学び、ドイツ留学で衛生学を修めた、内務省衛生局出身の医学博士であった。長く中央衛生会委員を務めると同時に、回生病院院長と鎌倉病院顧問として名医の名を博した臨床医でもあり、さらに生命保険会社の診査医長（保険医学会長も兼務）としても活躍しており[15]、かつ資産家でもあっただけに、家達にとって「厳選された」親しい名士であったことは間違いなかろう。

ウ　「同方会」、「葵会」への出席

中浜東一郎が「旧幕臣の子孫」であることは、言うまでもあるまい。彼が、「同方会」に何時入会したかは、赤松範一の紹介により入会という記録（明治45年6月編集の「同方会誌三十五」の異動欄）が残っている[16]ので、明治の末年頃であることは確かであろう。

一方、「葵会」の方は、確認できなかったが、「日記」には評議員会に出席という記述があるので、恐らく創立当時（つまり明治44年）からの会員だったと推定できる。これら二つの会は、ともに旧幕臣とその子孫の親睦を図るという、同じ目的で結成されたので、両会が共催の形で行事を行うことも多かったようである。東一郎は還暦前の現役で、なお多忙を極める日常にもかかわらず、実に律儀で、かつ小まめに両方の会合に参加していることが「日記」から読み取れる。また、「日記」の書き手外抱いた印象からは、「同方会」の行事の方が、より親睦に力を入れた運営をしているように感じられる（葵会には、同方会のような「会誌」が残っていないため、厳密な比較をすることが出来ないのではあるが）。つまり、同方会では、会員を家族ぐるみで、行楽や演芸、余興、食事会などの催し物で楽しませる趣向が凝らされていた。一方の葵会には、会場もほぼ一定していて（陸軍の「偕行社」や海軍の「水交社」を使うことが多い）、家達公爵御一家が毎回、必ず臨席され、親しく個人的に面接する形での対話が行われていたようである。

「日記」によれば、東一郎が、最初に出席したのは、大正2年9月の同方会（綾子を同伴している）の方で、葵会より先きんじている（前記・ア②参照）。その後は、大正4年の一年間を例に取ると、同方会に2回＜5月2日（上州館林・茂林寺参詣）、10月16－17日（日光東照宮参拝）＞、葵会には1回＜6月26日（九段偕行社）

＞、参加している。以下、煩雑さを厭わず、両会への参加状況（日付と場所のみ）を時系列的に纏めて列挙しておく。

表1　東一郎の同方会、葵会などへの出席状況

	同方会	葵会	その他
明治 45			4.21 園遊会(千駄ヶ谷邸)
大正 2	9.28（水交社）		
大正 4	5.2 （上州館林） 10.16,17（日光東照宮）	6.26（偕行社）	
大正 5		10.28（水交社）	1.5　年賀（千駄ヶ谷邸）
大正 6	11.25（富士見軒）		1.5　年賀（議長官舎） 5.13　追悼会（上野寛永寺）
大正 7	6.16（本郷燕楽軒）	1.12 評議委員会　宝亭 4.27 園遊会 12.1	6.8 相続 50 年祝賀会（水交社）
大正 8	11.2（上野寛永寺）	5.23 評議委員会 （偕行社） 6.15（水交社）	9.17 千駄ヶ谷東照宮例祭 10.11 育英会(千駄ヶ谷邸)
大正 9		10.25 評議委員会 （偕行社） 11.21（富士見軒）	9.17 千駄ヶ谷東照宮例祭
大正 10	9.17(共催)	9.17(共催)	9.17 千駄ヶ谷東照宮例祭 10.8 渡米送別会（如水会）
大正 11	11.19 （上野東照宮）		
大正 12	5.20（横浜三渓園）	5.6 評議委員会 （偕行社）	
大正 15	5.16（川越喜多院）	6.6（工業クラブ）	
昭和 2		6.19（工業クラブ）	5.15 戊辰殉難者法要(上野寛永寺)
昭和 3	5.15 （上野東照宮） 11.25 (大坂ビル)	2.29 役員会(葵会事務所) 5.26(東京会館)	
昭和 4	10.19 (今川小路維新号)	6.9 評議委員会 （偕行社） 6.22（富士見軒） 10.13（偕行社）	
昭和 5	1.31(共催)	1.31(共催)	1.31 喜久子姫高松宮とご婚約の祝賀会
昭和 6	11.27（今川小路維新号）	5.3(富士見軒)	
昭和 7		5.28（上野精養軒）	
昭和 8		5.23 評議委員会（偕行社） 6.15（水交社）	
昭和 9		5.26 評議委員会（偕行社）	
昭和 10		6.15（水交社）	